

「やらされ探究」から「マイ探究」へ！

生徒が主体的に取り組む学習であるはずの探究学習に「やらされ感」を抱く生徒、教師は少なくない。探究学習を生徒、教師が自分事化し、よりよいものとするためにはどうすればよいか、事例を通じて考える。

Turning Point

課題の
設定方法の
見直し

生徒の興味・関心を基にしたり、
教師の専門性を生かしたりして課題を設定し、
深く、楽しい探究学習を実現
福岡県・福岡市立福岡高校

生徒の 転換点

SDGsに関連した課題を設定する探究学習から、生徒が自分の興味・関心に基づいて課題を設定する探究学習に転換

教師が探究学習のあり方について 教科・分掌を超えて語り合う

福岡県・福岡市立福岡高校ではこれまで、2年次からの総合的な探究の時間においてSDGsに関連する課題を設定する探究学習に取り組んできた。総合的な探究の時間は地球規模の課題に触れる機会となる一方で、解決が容易ではない問題にどのように向き合えばよいか戸惑う生徒もいたと、指導教諭の武林哲朗先生は語る。

「例えば、地球環境の保全から地域のごみ問題の解決を課題に設定した生徒たちは、学校周辺にごみ箱を設置する計画を立てました。高校生なりに問題を解決しようとする姿勢は素晴らしいと思いつつ、単純な解決方法を提

案する生徒たちを見て、『本当に生徒たちが取り組みたい探究学習になっているのだろうか』と思うことがありました」

また、小・中学校でSDGsに関する調べ学習に取り組んだ生徒が多く、「高校でもまたSDGsを取り上げるのですか」といった声も上がったことから、高校ならではの探究学習に取り組ませる必要性もあった。

そうした課題を踏まえて2024年度の3学期、同校の探究学習を推進するキャリア教育部の徳浦望先生と松本弥生先生が中心となり、生徒も教師も楽しく取り組める探究学習のあり方について、教科・分掌を超えて教師の声を聞いて回った。

「先生方と話をすることで、設定する課題はSDGsに関するものには限定せず、身近な興

学校概要

設立 1900（明治33）年
形態 全日制／総合学科／共学
生徒数 1学年約320人
2025年度卒業生進路実績 国公立大は、九州工業大、福岡教育大、佐賀大、鹿屋体育大、大阪公立大、北九州市立大などに20人が合格。私立大は、明治大、早稲田大、関西学院大、西南学院大などに延べ694人が合格。短大・専門学校進学62人。就職8人。



1学年担任・
25年度キャリア教育部
松本弥生
まつもと・やよい
同校に赴任して3年目。国語科。



キャリア教育部主任
徳浦望
とくaura・のぞみ
同校に赴任して3年目。英語科。



指導教諭・進路部主任
武林哲朗
たけばやし・てつろう
同校に赴任して8年目。理科（物理）。

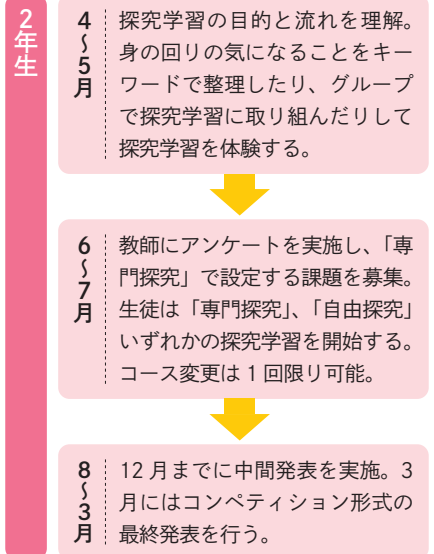
* ベネッセが提供する、進路・探究・表現学習を統合的に支援するデジタル教材。

図1 福翔「SOUTAN」プロジェクトのコース構成 (25年度)

- 「専門探究」12コース
- ・漢文に見る古代中国の思想
 - ・日本古典文学からくみ取る先人たちの恋愛観 (日本文学・国文学)
 - ・数学をひもとく
 - ・陸上競技の競技力向上
 - ・福翔メディア戦略
 - ・言語を科学する
 - ・AIを活用した言語学習
 - ・筋トレによる身体的影響について
 - ・スポーツ栄養学から学ぶ～スポーツ選手の体調管理について～
 - ・経済と金融について
 - ・野球の不思議を科学する
 - ・書之美

- 「自由探究」8コース
- ・人文科学 (歴史・文学・言語・地理など)
 - ・社会科学 (経済・政治・社会など)
 - ・自然科学 (物理・化学・生物・数学など)
 - ・応用科学・工学 (情報科学・医学・農学など)
 - ・文化・芸術・エンターテインメント (音楽・美術・書道・演劇・スポーツなど)
 - ・健康・看護 (栄養学・フィットネス・美容など)
 - ・地域・福祉 (高齢者福祉・地域活性化・インフラ・ボランティアなど)
 - ・メディア (広告・ソーシャルメディア・新聞など)

図2 福翔「SOUTAN」プロジェクトの流れ (26年度)



※学校資料を基に編集部で作成。

探究学習に関する生徒の相談の質が変容した

生徒が自分の興味・関心に基づいて課題を

味・関心を基に設定できるようにし、さらに先生方の専門性を生かした課題を設定できるようにもしようと考えました」(松本先生)

そうして、同校の教師が得意分野を生かして課題を設定するゼミ形式の「専門探究」、生徒がグループまたは個人で自由に課題を設定し、伴走役の教師と一緒に探究学習に取り組む「自由探究」の2本立てとする素案ができた。

25年度1学期、総合的な探究の時間を担当する約20人の教師に、「専門探究」で設定する課題を募ったところ、約10人の教師が具体的な課題を挙げ、「専門探究」の担当として名乗り出た。

「そのほかの先生方からは、自然科学、社会科学などの分野で、生徒と話し合いながら課題を設定したいといった声が上がったため、教師が設定する課題で教師と一緒に探究学習に取り組むか、教師の支援を受けながら自分で課題を設定し、探究学習に取り組むかを生徒が選べるようにしました(図1)」(徳浦先生)

さらに、自分の興味・関心に基づいて探究学習に取り組んでほしいという生徒への思いから、「専門探究」「自由探究」いずれかを選択した後、約1か月間を試行期間とし、生徒が選択したコースの変更を1度まで認めることとした(図2)。

設定する探究学習に変えたことで、生徒の「もっと知りたい」「なぜこうなるのかを考えたい」といった意欲が高まったと武林先生は語る。

『「自由探究」の「自然科学」のコースに、筋肉量と投げるボールの速度の相関を探究したいという生徒がいました。物理担当で野球部の顧問の私が生徒の伴走役を務めました。どのようなデータが得られれば根拠のある仮説が示せるのかを生徒と一緒に考えることはとてもやりがいがありました。以前であれば、生徒の相談の多くは、『何をすればよいですか』といったものでしたが、今では『どうしたら仮説が証明できますか』といった質のものに変わりました』(武林先生)

生徒の変化に呼応するように、教師の伴走の姿も変わってきたと松本先生は語る。

『生徒と一緒にこの課題に取り組んでいるのだけれど、心あたりがある研究者はいますか』『調査結果の分析方法について相談に乗ってくれる人はいますか』などと教師間の相談内容はこれまで以上に前向きなものになりました』(松本先生)

SDGsに関連した課題を設定する探究学習に取り組む中で得た知見も生かしながら、目の前の生徒によりふさわしい探究学習を教師としてこれからも探究していきたいと徳浦先生は語る。

「今後は生徒への声かけなどのノウハウを校内で蓄積しながら、本校の探究学習を更新し続けていきたいと考えています」(徳浦先生)